

# 弱者の意味

## — 遠藤周作作品研究 —

浜崎明子

### はじめに

カトリック作家、遠藤氏の小説の基軸となるものは、西欧の根本をなす基督教を、日本人である自分が如何にして自分のものにするか、という問題の追求である。

しかし、私がひかれたのは氏の小説に登場する弱者の存在であり、氏の小説の中で轟く弱者の暗く、醜い表情だった。弱者である私には、氏の小説に無関心でいることはできなかったのである。

「小説家の義務はあくまで人間凝視である」（「私の文学」と語る氏の視線は、まず、氏自らの内なる暗部に向けられたものと思える。氏は、心に潜むエゴイズムや暗い衝動に突き上げられて罪を犯さざるを得ない弱い人間存在を、自己凝視によって捉えているのである。

そして、長崎で一枚の踏絵を見た瞬間から遠藤氏の内では生き始めた弱者の存在が、氏自身の自己凝視と相俟って次第に大きく膨らんでいき、やがて氏がイエスとのつながりを深めていったことを考えると、遠藤氏の文学における「弱者の意味」を問うことはあながち無意味なことではないと思うのである。

そこで、まず『沈黙』『死海のほとり』によって、氏の課題であるイエスの母性化と関連させながら「弱者の存在」を問い、次いで「軽小説」や「ぐうたらシリーズ」に示される「弱者の意味」を考えていくことにする。

### 一 弱者の存在

『神々と神と』で提出した「一神論と汎神論」という問題を『沈黙』で締め括ることで第一期を終える、と遠藤氏自ら語るように、氏は、氏自身が日本人としての自己を偽ることなく実感でき、しかも基督教だと言えるものを『沈黙』の中で答えている。それは、人間の罪を許し、共に苦しむ存在としての、母性的なイエスである。

しかし、「一神論と汎神論」を追求した第一期の終りに書かれた『沈黙』には、一つの到達点とともに新しいテーマの内在が認められ、さらにそれについての展開も認められると思う。新しいテーマというのは、「弱者にとってイエスはどういう意味を持つか」ということである。そこで、以下には、『沈黙』によって「弱者の存在」を問いつつ、弱者に踏まれるイエスの存在も併せて考えてみたい。

迫害によって切支丹信徒達は、「自分の信仰は本物か」という自

己検証を自らの心に投げかけねばならなかった。自分は何者か。如何なる苦痛にも耐えて自分の信じたものを貫く強者か。それとも、それらの苦痛の前に自分を裏切る弱者か。そして、踏絵を踏んだその瞬間から転び者としての「弱者の存在」が生き始めるのである。

転び者キチジローは、性格は善良であるが、拷問と死の恐怖のために信じるものを裏切ってしまう弱者である。しかし、キチジローは、転んだ後も、自分が結局はなれなかった強者としての仲間の処刑を犬のような哀しい眼で見つめ、自分が裏切った布教司祭ロドリゴの後にどこまでも従って行く。まるで棄てられた女が、なお男の後から、とぼとぼとつき従って行くように。

その足は何度も踏絵を踏んだ。なぜ、そうまでして再び捕われに行かねばならぬのか。

踏絵は踏んだ者には、踏んだ者の言い分があつと。踏絵をば俺が悦んで踏んだとも思つとつか。踏んだこの足は痛か。痛かよオ。

キチジローが叫ぶ「足の痛み」とは、信じる者を裏切り傷つけたことに対する「心の苛責」であり、その「痛み」は、誤魔化しきれぬ罪業感、屈辱感としていつまでもキチジローの心に残り、癒やされることはなかった。その「痛み」ゆえに、キチジローはロドリゴを追い、再び踏絵の前に自分を置かねばならないのである。

転び者が、後悔と恥とで身を震わせなかつたと、どうして言えよう。彼らが、転んだ後もなお「痛み」を抱きつつ、ひたすら歪んだ指を合わせ、言葉にならぬ祈りを唱えたとしても、それは棄教と言われねばならぬのか。

遠藤氏は、正しい信仰の形をとらぬ信仰を続けるかくれ切支丹の

苦しみに自分を重ね、「祈りと言うのは人間の汗や泪が感じられ、血の通い、心にしみる言葉の筈だった」(『小さな町にて』)と言う。氏は、正でなくても真である信仰を語りたかつたのではないだろうか。それは、独自のイエスを掴んだロドリゴと、転びながらも、なお信仰を棄て得なかつたキチジローの生涯が示している。

誰が弱者を裁き得るのか。弱者キチジローはロドリゴの許しを求め、執拗に追い続ける。しかし、ロドリゴはそのキチジローを許せないのである。

ロドリゴは最初、キチジローに対する強者として描かれるが、それはロドリゴが布教司祭としての理想・虚栄心・義務に覆い被されたまま、まだ自己の弱さを問われる場に立たされていなかっただけであつて、ロドリゴはやがて強者から弱者に陥落して行くのである。

ロドリゴの同僚ガルベは、自分のために殺される信徒達を追って海に消えた。しかし、ロドリゴはその光景を目の前にしながら動かになかつた。その時、ロドリゴは初めて傷を持ち、背教司祭フェレイラに対しても優者ではなくなる。

(私はあなたを責めるために来たのじゃない。あなたを裁くためにここに居るのではない。私は優者じゃない)

強者の鎧に傷が付いて、ロドリゴは自分を役人に売つたキチジローへの恨みを解くが、軽蔑の気持ちは拭えなかつた。なぜなら、ロドリゴは、イエスを売つたユダに対するイエスの気持ちをまだ理解できていないのだから。

『沈黙』の頂点で、ロドリゴは、遂に背教か信徒の命を見殺しにするかの選択を迫られる。フェレイラは、栄光の死を望むロドリゴ

の虚栄心を突いた後、言葉巧みにロドリゴを背教に誘い、ロドリゴは信徒の命の救済と自己の弱さに対する自覚とが相俟って、遂に踏絵の前に立つ。

ロドリゴが日本に来て初めて見るイエスの顔は、醜く凹み疲れ果てていた。

司祭は足をあげた。足に鈍い重い痛みを感じた。それは形だけのことでなかった。自分は今、自分の生涯の中で最も美しいと思ってきたもの、最も聖らかと信じたもの、最も人間の理想と夢にみだされたものを踏む。この足の痛み。

この「足の痛み」を実際に知ることがロドリゴには必要だったのである。弱者キチジローと同じ「痛み」を味わい、キチジローと同じ地点に立った時、ロドリゴは弱者を裁き軽蔑し得る何者も存在せぬことを理解する。

(裁くのは人ではないのに……そして私たちの弱さを一番知っているのは主だけなのに)

人間とは、本来的に業を背負い、罪を犯す弱い存在ではないだろうか。自己に内在する弱さに気付かずに、同じ弱さゆえに罪に塗られてしまった弱者を裁く権利を誰が有するだろう。

「強い者も弱い者もないのだ。強い者より弱い者が苦しまなかつたとな誰が断言できよう」

行為で心は量れない。人間の弱さを知るイエスならば、人間の心に潜む苦しみの量だけを問題にするのではないだろうか。

ロドリゴは、踏絵を踏んで初めてユダに対するイエスの心を理解する。ユダの「心の痛み」はロドリゴの「足の痛み」であり、イエスはロドリゴを許したようにユダもまた許し、哀しみに充ちた愛の

眼差しを投げかけたに違いないのだ。キチジローにしても、イエスの罪の許しは、彼の「足の痛み」と殉教できなかった悲しみにおいて既に与えられているはずなのである。

(踏むがいい。お前の足は今、痛いだろう。今日まで私の顔を踏んだ人間たちと同じように痛むだろう。だがその足の痛さだけでも充分だ。私はお前たちのその痛さと苦しみをわかちあう。そのために私はいるのだから)

ロドリゴは、この地点まで来ないと、踏絵を踏んだ弱者達の「痛み」に耐えきれず、「踏むがいい」と許しの声を発するイエスの存在を知ることができなかったのである。ここにおいて、ロドリゴは弱者に踏まれ、なおかつ許し、ともに苦しむ存在としてのイエスを捉え、その弱い人間性のすべてを委ねることのできる信仰の門口に立ったのである。

では、なぜロドリゴのイエスには、常に人間が隠そうとする、その弱い人間性のすべてまで委ねることができなのか、その要因を探るために、ロドリゴの踏絵の瞬間が極めて肉感的であり、情念的であるという点について考えてみたい。

「司祭は両手で踏絵をもちあげ、顔に近づけた。人々の多くの足に踏まれたその顔に自分の顔を押しあてたかった。」

「その時彼は踏絵に血と埃とでよれた足をおろした。五本の足指は愛するものの顔の真上を覆った。この烈しい悦びと感情とをキチジローに説明することはできなかった。」

この、理性でなく、肉感で、情念で、イエスを捉えた点に、遠藤氏の特異性がある。

それは、第一に、弱者の存在する世界、人間の弱い部分、暗い罪

を背負った部分においても氏のイエスの声は響く、ということであり、第二は、氏の母性体験に由来するものと思われるが、自己のイエスを捉え得た氏の情念的な喜びの烈しき、ということである。

第二の母性体験については後で述べることにし、ここでは、第一の人間の弱い部分とイエスとの関わり方について見ることにする。

『その前日』という短篇は、転び者藤五郎の物語と、危険な手術を明日に控えた主人公の出来事が同時に進行する。踏絵を持って来てくれるはずの神父の代わりに、エロ写真を持った男が偶然、主人公の病室を訪れる。

しかしあの縁の黄ばんだ暗い影は、やはり神が存在すること  
を証明している。

主人公は、死の恐怖を抱きながらそのエロ写真の中に、どうにもならぬ情欲に生きる人間の姿を見る。それは、死の恐怖の裏側に潜む生への限らない執着を深めるとともに、人間の神を求める姿を彼に感じさせる。

影のなか、男の暗い肉体と女の暗い肉体とが呻きながら抱きあうように、銅版の基督の顔と人間の肉とはふれあうのだ。

死の恐怖を抱く弱い人間の足は、生への限らない執着のためにオズオズと踏絵の基督の顔に触れる。どうにもならぬ人間の弱さの中には、おのずと神を求める姿があり、遠藤氏の基督はその人間の最も弱い部分で人間と触れ合おうとする。しかも、氏は傷つける存在の「心の痛み」と傷つけられる存在の「許し」という、これほど密着した姿勢と関係を持つ信仰を、踏絵を踏まねばならなかったかくれ切支丹によって掴んでいるのである。

『月光のドミナ』では、イエスと思われる影の声が、情欲の泥沼

に溺れる青年に言う。「その情欲がいつかお前に私を求めさせるだろう。」と。

遠藤氏の言いたいのは、人間が本心に心からイエスを求めるのはどうにもならぬ暗い世界、泥沼の底の底に沈み込んだ時であり、イエスはその人間のために存在するという事であると思う。つまり、遠藤氏のイエスは肉欲とか情念という人間の弱さ、醜さにおいて求められ獲得できる存在なのであり、それゆえ、ロドリゴは彼の弱さまで委ねることができるのである。

ロドリゴは、「私とその愛を知るためには、今日までのすべてが必要だったのだ。」と言う。それは、イエスが弱者のために存在し、ロドリゴがその存在を知るためには、人生の高みから見おろし裁断する存在でなく、弱者の存在となる必要があったことを示す。

そして、「私の今日までの人生があの人について語っていた。」というロドリゴの言葉は、イエスは声を出して語るとかいうのではなく、弱者とともに苦しむという事によって、弱者という存在を通して自らの存在を語っているという事なのだと思う。

背教させられて岡田三右衛門という日本名を与えられたロドリゴとキチジローの後日談とでも言うべき「切支丹屋敷役人日記」でロドリゴが書かされる「宗門の書物」とは、遠藤氏によると、「私は転びます」と誓う「誓約書」であり、それはロドリゴが再び「私は基督教徒です」と宣言したことを意味しているのである。そして、キチジローも「切支丹の本尊」を持って処罰される。

この転んでは立ち直ることを繰り返す二人の傍にイエスは確かに存在し、二人がその信仰を棄てぬという所に真の信仰があるとは言えないだろうか。

『沈黙』に描かれた弱者とは、人間が本来的に持つ弱さゆえに、罪や裏切りを犯さざるを得なかった存在であり、その弱者に踏まれるイエスは、弱者が抱く裏切りの「痛み」ゆえにその裏切りを許し、なおかつ共に苦しもうとする母性的な存在だったのである。

## 二 弱者と母性

『沈黙』のイエスは母性的であった。そこで、なぜ、遠藤氏のイエスが母性的であるのか、弱者と母性とはどのように結びつくのかの二点について考えてみたい。

遠藤氏は、日本人の宗教心理が意志的な努力の積み重ねよりは絶対者の慈悲にすがらうとする傾向が強いことを、日本的な母の盲目愛、日本的な母の包容力を持つ宗教、浄土宗の中に認め、かくれ切支丹の信仰が西洋人の指導から離れるに従って「母の宗教」に移って行ったことを『父の宗教・母の宗教』で語っている。

つまり、遠藤氏は、宗教が日本に根づくためには母性的な要素が必要であり、基督教は新約聖書によって「父の宗教」的な旧約の世界に母性的なものを導入した「父母的な宗教」であるから、「母の宗教」が必ずしも基督教から外れないことを語りたかったのである。これが、氏の出発点からのテーマ「基督教と日本人」の到達点であったのである。

遠藤氏のイエスが母性化するのには、日本人の宗教心理を探る以前の問題として深い要因が二つ考えられる。一つは氏自身の母性体験であり、もう一つは弱者たる自己の自覚である。

氏の母親は「烈しく生きる女」(『母なるもの』)であり、周囲の

人々の人生に痕跡を与えたが、「たった一つの信仰を求めて」「きびしい祈りの生活を自分に課し」子にも同じ生活を要求し、その生活を実践できた強い人だったらしい。氏が限りない愛着を抱くその母親が与えてくれた基督教を棄てぬために、氏は、まず弱者たる自己が強者たる母親を捉える必要があったのではないだろうか。

氏は、聖母マリアと現実の母親とを結びつけて母性のイメージを創り出し、それをイエスに投影させたものと思われる。ここにおいて、氏は遂に基督教を独自のものにするとともに、母親をも捉えることができたのであり、その悦びの烈さが『沈黙』の踏絵の一瞬间に流出しているのだからと思う。

また、遠藤氏は、弱者たる自己の自覚ゆえに、裏切り、転びを出発点とするかくれ切支丹に視点を置き、彼らが、父なる超越者の下では得られない自分たち、背教者への救いを、聖母マリアに求めたことに感動する。かくれ切支丹は、聖母マリアに、「許してくれる存在」である自分たちの母親を見たのであった。弱者にとって母性とは、許してくれる存在なのである。

そこで、これから遠藤氏の抱く母性のイメージを考えて行くことにする。そのイメージは三つある。

第一のイメージは、最も重要で、弱者との関連が深い、許してくれる存在としての母性である。

私が自分は基督教をもう信じられぬと母に告白した時、彼女は烈しく怒るかわりに、真底つらそうに、涙をいっぱいたたえた眼で私をじっと見た。(『ガラヤの春』)

両手を前に合わせて、私を背後から少し哀しげな眼をして見ている母なのである。(『母なるもの』)

この母性は、裏切られながらも子を許し、死後もなお子の背後から哀しげな眼をして見守り堪え続ける母を感じさせる。

第二のイメージは、人間の「低い人間性」を「より高い人間性」に変化させる役割を持つ存在としての母性であり、氏はそのイメージを聖母マリアに見いだしている。

氏は『聖書のなかの女性たち』（『聖母マリアⅢ』）で、基督が初めて行なった奇蹟「水を葡萄酒に変えた」カナの奇蹟を「人間の弱さを肯定し、しかもそれを人間の強さ高貴さに変えようとしている点に注目」すべきであると述べている。

その水を葡萄酒に変えることをイエスに頼んだのは聖母マリアであり、その点ですべての女性の象徴である聖母マリアに、男のもの低い人間性をより高く変化させて行く女性の役割を見ているのである。

遠藤氏の母親も、ぐうたらだったという氏に向かって「この世界で一番高いものは何にもまして聖なる世界であり」（『六日間の旅行』）「より高い世界の存在せねばならぬことを魂の奥に吹きこ」（『影法師』）むことによって、氏の意識を高めている。この点で氏の母親の母性のイメージは聖母マリアのそれに結びつくのである。

第三のイメージは、自分の運命だけでなく、子供の運命も、愛する男の運命もそのまま受け入れる受容力を持つ、同伴者のな存在としての母性である。

遠藤氏は、『聖書のなかの女性たち』（『聖母マリアⅣ』）で「マリアは決して与えられた運命に反抗しようとしなかった。むしろその運命を一人の女として背負うことによって、——人間的なものから人間をこえたものに高まっていつているのです。」と述べている。

この運命の受容は、『私のもの』の「棄てぬ」という意識につながるものと思える。

主人公、勝呂は、イエスと妻を棄てぬと言う。彼はイエスを「あの男」と呼び、おむすびのような顔をした妻を「自分の妻」と名付け、自分に密着させることで、自分の意志で選んだ存在ではない二人を彼自身の人生の作品として引き受けようとする。

遠藤氏は、両親の離婚と病氣という、引き受けざるを得ない二つの大きな運命を体験した。その体験ゆえに、氏は与えられた運命をそのまま背負う姿勢を聖母マリアから学び取り、「棄てぬ」ことに意味を見いだそうとしたのではないだろうか。

今まで述べて来た三つの母性のイメージがすべてイエスに托されて行くのであり、遠藤氏の内では、「母」「聖母マリア」「イエス」は一つの系列を成しているのである。同時に、この三者は、「哀しい眼」という表現で象徴される。この「哀しい眼」は、遠藤氏の昭和三十五年から昭和三十七年に渡る療養生活の中で育まれて行ったもので、最初は犬や鳥の眼で表わされた。

人間が、どうしようもない運命の前に立たされて本当に一人ぼっちになった時、求めるのは人間でなく物言わぬ動物である。動物の「業」というものに耐えたような哀しさ」（『小禽』）を湛えた眼が孤独な人間の対話者・同伴者として動物を選ばさせるのだろうか。

動物は黙々と存在し、しかし黙ってその眼でじっと人間の人生や心を見ているのである。遠藤氏は「その眼から私は人間を見ている基督の眼を連想してしまう」（『廃墟の眼』）と言う。

人間の人生をじっと見ている「哀しい眼」とは、人間の裏切りに耐える「許しの眼」であり、罪を犯さざるを得なかった人間の苦し

みに同化している眼なのである。

最後に、弱者と母性の結びつきについて再び考えてみたい。

先に、弱者にとって母性とは許してくれる存在であることは述べた。氏にとって、弱者とは、何者かを裏切ったことによって存在する。罪を犯した弱者を無限の愛によって包みこむ存在は、その母にほかなるまいが、子は成長する過程で度々母を裏切り傷つけてしまうものである。

母が生きている間、彼は彼女をわざと傷つけたり、反抗したりしたが、自分を悲しげにじっと見つめる母の眼はそのたび毎に矢代の胸を痛くさせた。彼女が死んだあとも、その眼はやはりどこからか彼をじっと見つめていた。(『巡礼』)

なぜ、子の胸は痛むのか。母が自分に傷つけられながらも、烈しく怒るかわりに自分を許し受け入れてくれたことに対する感動と罪悪感が、痛烈な「痛み」となって子の胸を抉るからである。

氏は、『海と毒薬』で人間を烈しく怒り罰する神を持たぬ日本人の罪悪感の欠落を語った。では、氏が『沈黙』で到達した「許し」を本質とする「母の宗教」の下では、この罪悪感はどのように存在するのか。

氏は、この罪悪感を母の「許し」に対する子の「痛み」として捉える。この「痛み」こそ『海と毒薬』で戸田が求め続けた「心の苛責」なのである。神の罰や社会の罰に対する怖れによって作られる「罪悪感」でなく、子自らの内から生まれる「心の苛責」なのである。しかも、その「痛み」が契機となって子の意識は高められる。そして、子が母の死後もその「許し」の眼を自らの背後に持つ時、その「許し」に伴なう「痛み」によって、弱者たる子の存在は高め

られていると言えるのではないだろうか。

つまり弱者は、傷つけられながらも無限の許しをこめて傷つけた存在の運命まで受容する母性的な存在によって、その存在を高められるのである。そして、氏にとって母性的な存在とは、信仰上のイエスであり、日常的な世界に描かれた氏の「軽小説」の主人公達、『おバカさん』のガストン・ポナバルト、『わたしが・棄てた・女』の森田ミツという人物なのである。

### 三 弱者とイエス

遠藤氏は、『死海のほとり』をめぐって「という対談で、この小説に出てくるマデイ神父が強制収容所で身代りになって死んだ行為について、「自分ではない、しかしできない者にも何かあるだろう」と述べている。この言葉を強者に対する弱者の言葉として受け取るならば、この小説で氏が捉えたイエスの姿こそ、氏の目指す生き方であり、弱者の取るべき道を示すものと言えるだろう。その観点に立って『死海のほとり』のイエスの姿を考えて行くことにする。

『死海のほとり』は、『沈黙』という日本の切支丹弾圧時代の中で氏が捉え得たイエスを、イエスを生んだ風土そのものの中で確かめ直そうとした作品である。

『沈黙』のイエスは、踏絵を踏んだ転び者を無限の許しを湛えた眼で見つめ、なお転び者の痛さと苦しみをわかち合おうとする母性的なイエスだった。『死海のほとり』では、この『沈黙』の頂点で捉えた母性的なイエスを、無力であるがゆえに、人々に見棄てられ

苦しむ人間の同伴者たらんとするイエスの中に確かめ直し、かつその復活の意味を探っている。

△群像の一人▽に描かれるイエスは徹底的に無力な存在である。

死にかけて老人の枕元で一夜をあかし、子を失った母親のそばにじっと腰かけ、夕暮、眼の見えぬ老婆の手を握ってはいたが、彼らを治したことはなかった。

現実<sup>ニ</sup>に今苦しんでいる者は、その苦痛が癒やされることを願い、イエスに奇蹟を行なうことを要求する。しかし、イエスは無力であり、その愛は現実では無効なのである。

しかし、奇蹟とは何だろうか。氏がこの小説の中に奇蹟物語を入れなかったのは、奇蹟とは現実に現われる<sup>し</sup>徴ではなく、十字架上で自分を裏切り見棄てた者たちに怒りや恨みを持たず、逆に彼らの救いを神に願ったイエスの愛の心にあることを語ろうとしたためではないだろうか。人間の行為には限界がある。徴はその場限りのものである。しかし、愛の心ならば人から人へといつまでも存在し続けるのである。

結局、イエスがしたことは、悲しむ人の傍に佇むこと、病気で苦しむ人の手を握ることだけだった。イエスが、傍に佇むことによって、手を握ることによってしようとしたことは、悲しみの原因をなくすことではなく、また肉体的な苦痛を癒すことでもなく、それらに伴なう人間の孤独感という精神的な苦痛をわかち合うことだった。

なぜ、遠藤氏はイエスを無力な存在として描いたのか。一つにはイエスは無力な存在であるがゆえに邪魔にならず、同伴者という形で、苦しむ人間の傍にひたすら影のように寄り添うことができるのであり、もう一つには、イエスはこの世で無力な存在だったからこ

そ、苦しくみじめな死を経て、人間の永遠の同伴者として復活した意味があるのである。

△群像の一人▽は、イエスの十字架の死で終わり、△巡礼七▽でその復活の意味が探られる。

ノサック神父が物資の乏しい戦時中に病人のために渡したバターや牛乳は、病人の口には入らなかった。マデイ神父がユダヤ人収容所で身代りに餓死したにもかかわらず、当の男は結局助からなかった。この現実における愛の無効性にもかかわらず、普通の人に行きたくないことを愛の力でその人が為したということに、私は人間に対する一縷の希望を抱かずにいられないし、イエスの復活とはこういう形で愛の心が受け継がれて行くことを言うのであろう。

しかし、イエスを見失った「私」が、イスラエルの地でイエスの足跡を辿り、その確かな姿を探るとともに、その行方を探るコバルスキという弱い人間の傍にイエスはいないのだろうか。

「私」にとつて同じ弱者であるコバルスキがユダヤ人収容所で一人みじめに死んだとしたら、「私」はイエスを見失ったまま日本に帰らねばならなかった。

出発の日にコバルスキの最後を伝える手紙が「私」のもとに届いた。

収容所で、コバルスキは生き残るために卑屈に立ち回っていた。彼は、パンを他人にやるようなことはしなかった。修道士でありながら祈ることもせず、マデイ神父のように身代りに死ぬことなど、勿論しなかった。臆病なコバルスキには、したくでもできなかったのである。

到底、自分にはできぬことをした強い人のことを辛く思いながら、



コバルスキは「あれは自分のせいじゃない。たった一つのパンをやればこつちが死んでしまう世界だったんだから。」と自己弁護せずにはいられなかった。

だが、そのコバルスキが飢餓室へ連れて行かれる朝、彼の最後の日の食糧になる筈だったコッパンを仲の良かった少年にやった。それは、コバルスキが最後の最後にやっとできた唯一の愛の行為であったのである。

虐殺記念会館に置かれた、女の下着を思わせるような桃色の紙に包まれた石鹸。もし、コバルスキがそんな惨めな姿になったとしたら、そして、生きている間、弱虫だったコバルスキが、死んで人間の汚れを洗う存在になったとしたら、イエスは、マデイ神父たちの傍だけでなく、みじめなコバルスキの傍にも確かにいたはずである。なぜなら、イエスは「無力なくせに自分の体から絞りだした苦痛の脂で、たくさんの人間の悲しみを洗おうと考えられ、そのために最もみじめな死を味わったのだから。そして、そんなイエスだからこそ、みじめなコバルスキの傍に立つことができるのである。

「私」は、イエスの復活とは、無力なイエスが十字架の死によって人間の永遠の同伴者となったことを意味するのではないかということ、同じ弱者であるコバルスキを通して多少は感じて日本に帰って行く。

『死海のほとり』に描かれた無力なイエスは、罪に躓いた無数の人間や病気を背負った人間の苦しかった人生を理解し共感しようとし、死の間際まで、自分を裏切った人間たちを許し愛そうと努力した。

そんなイエスの同伴者としての姿こそ、氏が目指した生き方では

ないだろうか。氏は孤独で弱い人間の人生の共感と、人間に対する愛と信頼を、「ぐうたらシリーズ」や「軽小説」の世界で語っているのである。

そして、弱者のとるべき道とは、自分の弱さを自覚しつつ、その弱さに耐えて自分を生き、自分の弱さゆえに他者の弱さを共に哀しみ、苦しむことであろう。

#### 四 「軽小説」と「ぐうたらシリーズ」

遠藤氏には、純文学の他に「軽小説」と「ぐうたらシリーズ」と呼ばれる分野がある。この分野では、氏自身の人生観、人間観がユーモアをもって書かれていて、氏の文学を採る上で興味深く見落せぬものである。

遠藤氏の軽小説は、ほとんどが新聞小説である。氏は新聞小説を書き始めた頃、「東京新聞」に「新聞小説について」という一文を載せている。

現代作家の心にはたとえばデュマの「三銃士」やユーゴーの「ああ無情」のような今では失われたいわゆる小説らしい小説にたいする夢がひそんでいるわけだ。純文学の領域ではその批評家が何と言おうと夢はいろいろな条件のため、なかなか実現できぬのである。ほくは新聞小説という舞台に、この夢を実現させたいと考えている一人だ。

近代文学は、人間心理の裏側に潜む偽善やエゴイズムや虚栄心を摘出して見せ、現代社会は社会的に有用であるか否かによって人間の価値を量り、その中で人間は他人を疑い、何が本当で何が正しい

のか掴めずに彷徨わねばならなかった。

だが、氏はこうした人間観に反撥せずにはいられないのだ。『おバカさん』から始まる氏の夢を托された一連の新聞小説は、氏の純文学には見られぬ鈍舌によって、現代の人間観、価値感と相反する氏の理想の人間像を描き出している。

素直に他人を愛し、素直にどんな人をも信じ、だまされても、裏切られてもその信頼や愛情の灯をまもり続けて行く人間は、今の世の中ではバカにみえるかもしれぬ。だが彼はバカではない……おバカさんなのだ。人生に自分のともした小さな光を、いつまでもたやすまいとするおバカさんなのだ。

（『おバカさん』）

この「おバカさん」こそ、『死海のほとり』で他者への愛のみを語り続けた無力なイエスの原形であり、氏の理想の人間像である。イエスが無力だったのは、周囲の者がイエスにかける期待がイエス自身の選んだ生き方とあまりに違っていたためであるが、同じように一つの夢に一生懸命愛を注ぐ「おバカさん」の姿は、世間から見れば愚鈍であり無駄に映り、滑稽でありさえする。「おバカさん」とは、現代の社会的価値を持たない存在だからである。

だが、その「おバカさん」に実際に触れ合った人達が、一度は自分の生き方を振り返らざるを得ないのはなぜだろうか。それは、「おバカさん」の生き方に、現代では失われつつある人間性、他者を愛し得る心が呼び戻されるからではないだろうか。人間は確かに醜い。しかし、その同じ人間の心の中に、なお善意の存在すること、氏は語り続けてやまないのである。

また、氏は平凡な日常性に埋もれた弱い人間が、自分の弱さを背

負いながら、善意を持って一生懸命生きようとする姿を描く。そこには、氏の人生観が語られているのである。氏は、人間にとって「人生は重い。ドッコイショと言いたくなるほど重い。」（『どっこいショ』）だが、自分の生活や家族を背負うことによって、誰も合せつないほどに懂れながら叫べなかった『一、二、三ノ』という出発の合図が叫べることを語っているのである。

氏の純文学では、弱者は何者かを裏切ることによって存在したが、軽小説では、氏は弱者を社会的価値の圏外に置かれた弱い存在として描き、他者に裏切られても人間を信じ愛させることで氏の目指す生き方を語り、弱者に積極的な意味を与えている。

遠藤氏は「ぐうたらシリーズ」で自らを狐狸庵山人と称し、「世のため人のために一向に役たため話」（『わが青春に悔いあり』）ではあるが、「それがなければ世のなかみんなシンコクになり息がつかまってしまふ」無駄話を語る。この「ぐうたらシリーズ」について「シンコク」に考えることは、遠藤氏にとって歓迎すべからざる事であるとは思ふが、少し、この「ぐうたらシリーズ」の持つ意味を考えてみたい。

遠藤氏は「笑いの文学よ、起これ」（東京新聞）で、「私が夢想するのには」「近代文学が逆手に使った風刺の笑いが人間の孤独を深めるものであったのにたいし」、「文学における笑いが疎外された人間と人間」との「人間関係回復」に「役立たないかということである」と語っている。

私は、氏が「ぐうたらシリーズ」にこの人間関係回復の一役を荷わせているのだと思う。氏は「人生の悲劇や苦痛をそれによって解

放」(ユーモア文学のすすめ)することと、「信じられぬ世界や人間というものともう一度、交流する方法として」の笑いの存在に重きを置いているのである。

迫害時代にユーモアが生まれるというのは人間の生きる上での切羽詰まった智慧であるし、今日の人間社会では、人と人とのつながりが自らを道化とし、笑ひ者にならなければ互いの安心感が得られぬほど疎遠になっていると言える。

しかし、合理主義で息苦しい現代の世の中で氏が見つけてくるようなトボケた人物は、仮面を剥いだ人間の素顔を見せている。その素顔ゆえに、その人が把握でき、その人と通じ合える悦びが笑いとなるのである。

人間関係回復の笑いが今日ではそのように貧弱にならざるを得ない現実を嘯みしめる氏だからこそ、『断腸亭日乗』で作為の自分をこしらえた荷風について語る「荷風はその背景で本当の意味で孤独なのである。」(「かのように」という言葉は、そのまま「ぐうたらシリーズ」を書く氏自身の姿勢に、変らぬ意味を持ってくるのである)。

さらに氏は、「すべてのユーモア文学には居候的心情が隠されている」(「居候について」と言う。居候は、相手との最後の交流方法として微笑を使う。軽蔑されても言い返せず、相手を拒絶することもできぬ悲哀を内に隠して寂しく微笑するのである)。

つまり、遠藤氏の「ぐうたらシリーズ」とは、内に孤独を抱え込んだ氏の人間関係回復の最後の手段であり、氏の他者に対する必死のサービスピ精神の表われなのである。

そして、氏の好んで使う「ぐうたら」とは優等生にならぬことで

あり、平凡な人間の弱く愚かな部分に自ら立ち、晒し者になり、笑ひ者になることによって他者の孤独を癒し、心の交流を計ろうとする道化の精神こそ、氏がイエスに見た同伴者としての生き様を、自らの生きる指針として実現せしめるものであったと思うのである。

純文学が氏自身の信仰に肉迫して行くとともに、イエスの中に自己の生き方を探るものであったのに対し、「軽小説」と「ぐうたらシリーズ」は、氏自身がイエスによって捉えた生き方を、日常的な生活に置き換え、弱者の存在を通して語り、あるいは実践しているのである。

## おわりに

遠藤氏の文学は、劣等者、弱者の地点から書かれる。それは言い替えば優者にならぬことであり、決して人を裁かないということである。氏は、私たちと同じ地点に、私たちと同じ弱い人間として佇んでいる。氏は、その地点から、他者の苦しみを共感すること、人間を信頼することの大切さを語り、弱者としての生き方に積極的な意味を見いだしている。弱者とは人間の弱さを身をもって知っている存在であり、その弱さで他者と結び合うことができるということである。

今、氏の内にあると思われる「弱者は如何にして強者になるか」というテーマは、『イエスの生涯』の中でも、また完全には成熟していないように思われる。氏の文学のテーマが聖書の中から取り出される以上、それは困難な仕事であろう。しかし、今後、氏が如何なるテーマを持つとも、弱者の存在がその中で問われることは問

違わないと思われるし、弱者の存在が氏の作品に見いだされる限り、それは、私たちの関心を引きつけて離さないだろう。

〔評〕

遠藤周作の創作にかかると人物の中で、私をもっとも強烈な印象を与えられたのは、「沈黙」のキチジローであり、もっとも親しみを覚えたのもキチジローである。浜崎さんもそうであつたらしく、キチジローの存在の意味を明らかにすることから、遠藤周作の文学の本質に迫ろうとしている。弱者の意味を問おうとするかぎり、もっとも有効にして至当な方法であつたと思う。

それが証明されるのは、△弱者と母性▽△弱者とイエス▽を経て、△軽小説とぐうたらシリーズ▽に達し、△裏切ること▽と△裏切られること▽の關係が明らかにとらえられたときである。キチジローとおバカさんが、一つの根から生まれた双生児であつたことを知れば、遠藤周作の一見隔つたものと思える宗教文学とユーモア小説の統一は納得できるであろう。

このような方法も、大筋においては至当と認められるが、細部についてはまだ不十分な点がある。例えば、現実の母と聖母マリアとの結びつけかたなどはもっと慎重であるべきだろう。

浜崎さんは、在学中に二篇の小説を書いた人で、二作目はすばらしい出来映えであつた。この論文では、論文としての論理的整合性を重んじ、分析と論証を心がけているのだが、細部の検証には若干の不足が見られる。ひよっとすると、小説向きの文体と素質をもっている人ではないかと思われるのであるが、そうした自己を徹底的

に抑制した結果がこの論文である。研究論文という形式にとらわれず、もっとのびのびと、実感的評論をめざした方がよかつたのかもしれないと思つたりもするが、このような正負をもつた論文としてお読みいただければ幸いである。

（江後 寛士）